限りある資源を大切に！「広報あしや」はリサイクルによる、古紙100％を使用しています。

■新春メッセージにかえて　平成18年11月24日(金)／ルナ・ホール

■第42回 谷崎潤一郎賞 受賞記念 特別講演会「物語と私」（要約）

小川 洋子

芦屋と私と作品と

私は二〇〇二年から、ご縁がございまして、この芦屋に住んでおります。

谷崎潤一郎記念館から、自転車ですぐのところですので、私は日本で谷崎記念館の最も近くに住んでいる作家ということになると思います。

ですので、今回、谷崎賞をいただけたということは、大変ありがたく、嬉しく思っております。

芦屋で家を探そうと、不動産屋さんの車に乗って、北から南に向かい芦屋川沿いに走ったとき「ここは南仏かな」と思うくらいに驚きました。自分が生まれ育った岡山とは、あまりにも風土が違う感触を得ました。

松林がありテニスコートがあって、その反対側にはすごく大きなお屋敷が並んでいて、前を見ると海が見え、振り返ると山があり川が流れている。

風景がとても洗練されていて、どこか外国にいるような、とても乾燥した新鮮な風景だなと思い、一度で芦屋が好きになりました。

住みはじめてしばらくした頃、「広報あしや」の中の『歴史散歩』という小さなコラムに、芦屋に私立の動物園があったという、そのような紹介記事がありました。

そこには、戦前のことですけれど、ある製薬会社の社長さんのお家が、ロバ・サル・クジャク・リスなどを飼っていて、それを近所の子どもたちに無料で開放していたといったエピソードが紹介されていました。

また、そこの息子さんは、自宅動物園で飼っていたロバに乗って、精道小学校まで通っていたといいます。

それを読んだときに、ぱっと映像が浮かんできました。芦屋のお屋敷街に住んでいる子どもが動物に乗って毎朝学校に通う…、その小さなエピソードに心惹かれたことが、今回の受賞作となった「ミーナの行進」のスタートとなりました。

それを機に、芦屋のまちの歴史を調べてみますと、昭和四十年代にはすでに日本で初めてクレープというお菓子を売っていたお店があったとか、フランスパンを芦屋ではすでに食べていたとか、とてもワクワクするようなエピソードがたくさんありまして、そういう一つのまちを知っていく喜びの中で「ミーナの行進」のお話ができあがっていきました。

ですから、この小説は、私が偶然芦屋に住むということがなければ、決して生まれることのなかった小説だと思います。

もう一つ、私がこの作品で書きたいと思ったことは、自分の子どもの頃のことです。

子どもの頃の私が、本を読むことによってどんなに心を救われたか、あるいは、人生のいろいろなことを本によってどれだけ深く感じ取ったかということを、いつか小説の形で書き残しておきたいと、ずっと願っていました。

「ミーナの行進」では、ミーナと朋子という二人の少女が登場します。彼女たちが本を読む、本に触れるということで、大人の世界へ踏み出す前のひととき、どういう風に本の中で自由に心を遊ばせたか、その幸福な時代を書き記した作品です。

読書から得たもの

小学生の私が、最も夢中になった本は「ファーブル昆虫記」でした。その最初に取り上げられていたのは、スカラベつまりフンコロガシでした。

獣フンを前脚を器用に使ってくりぬき、自分よりも大きな完全な球形を造り出して、巣穴まで後ろ脚で転がしながら後ろ向きに運んでいく。そのような神秘的な営みが、今日も自分が立っているこの地つづきのどこかで起きている。自分とは姿も形も違う生き物が、神様の采配に見守られながら生きていると考えると、なんとも果てしない気持ちになりました。

そして、自分がこの巨大な世界の一部であるということを知り、その大きな流れに身を任せることの安心感を味わった気がします。

もう一つ、忘れがたい作品としてフィリッパ・ピアスの「トムは真夜中の庭で」があります。

私は、「ファーブル昆虫記」では、自分が広大で偉大な自然の一部であり、その大自然に護られていることの安堵感を感じ、一方「トムは真夜中の庭で」においては、自分が「特別な一人」であるという思いを得ました。この一見相反するような二つの「思い」は、実は人間にとって必要な、共存させるべき思いだと考えています。

つまり、自分を尊重しつつ、自己がすべてではないと理解でき、身を任せるに足りる全体というものがあり、その一部であると感じることで心に安堵が得られる。その両方が得られることによって、他人を許したり、不運を受け入れたり、「偶然」に意味を見い出したりということができるのではないでしょうか。間違いなく、私は『読書』によって自我の獲得という、大きな関所を幸福に通り抜けたと感じております。

本を読んでいますと、どうしても生きているものが「死ぬ」ということを考えるようになります。

私が読書において「死」と決定的に出会ったのは「アンネの日記」です。

なによりも、この日記ほど思春期の少女の内面を克明にいきいきと描写した文学はありません。

「死」が言葉では表現しきれないのと同じ意味で、思春期もまた本来表現できない「時代」です。その不可能を、思春期の只中にあった少女がやってのけた。この日記を読めば、十四・五歳の少女が閉ざされた狭い部屋の中で、どのように成長していったかが手に取るようにわかります。

アンネは、アウシュビッツからベルゲンベルゼン収容所へ移されて、飢えと寒さに苦しみながら、チフスで命を落として、その亡骸がどこへ埋葬されたかもわからないまま、あの世へ逝ってしまった。

アンネにとっての隠れ家の二年間が、スカラベの美しい宝石のようなさなぎの時代と同じ輝きを放ってくれた一瞬であってくれたことに、ささやかな慰めを感じるのです。

終わりに…

このたび、ご尽力くださるかたがあり、「博士の愛した数式」がイスラエル語に翻訳されることになりました。

早くから準備は進めていたのですが、七月にヒズボラがイスラエル兵士を拉致したことに端を発したレバノン侵攻で、大幅に発行が遅れてしまうことになりました。

このことは、自分の小説もまた現実社会とは無関係でいられないのだと、知るきっかけになりました。

翻訳されれば、もしかすると爆弾の飛び交う下で、私の小説を読んでくれる人がいるかもしれません。

そのエージェントがくれたメールの中に、「同じ本で育った人たちは、共通の思いを分かち合う」という一文が添えられていました。

民族も言葉も年代も性別も違う人間が、どこかで出会ったとします。その時、お互いの心を近づける一つの術は、その人がどんな本を読んで育ったかを確かめることかもしれないと思います。

もし、その人が「ファーブル昆虫記」や「トムは真夜中の庭で」や「アンネの日記」を挙げたとしたら、私はたちまちその人と心通わせることができるでしょう。

もう一つ、ぜいたくな望みを言えば、いつかそういう場面で、私の書いた小説を誰かが挙げてくれたら、作家としてこんなに大きな喜びはありません。

もちろん、その時、私はすでに死んでいるだろうと思います。しかし、自分が死んだ後に、自分の書いた小説が誰かに読まれているという場面を想像することは、大変大きな喜びであります。そういう場面を想像していますと、「死ぬ」ということの怖さを忘れます。

そういう思いで、私は今日も小説を書いております。

■昨年11月24日にルナ・ホールで催された小川洋子氏の谷崎潤一郎賞受賞記念特別講演「物語と私」の内容を、ご本人にご了解いただいた上で要約したものを掲載しています。

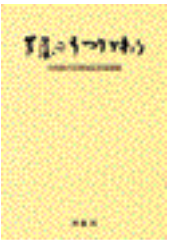
●小川　洋子(おがわ・ようこ)氏

昭和37年３月30日、岡山市生まれ。早稲田大学卒業。

昭和63年「揚羽蝶が壊れる時」で海燕新人文学賞受賞。平成３年「妊娠カレンダー」で芥川賞受賞。平成16年「博士の愛した数式」で読売文学賞、本屋大賞受賞。同年「ブラフマンの埋葬」で泉鏡花賞受賞。平成18年には、「博士の愛した数式」が映画化され大ヒット。同年、芦屋を舞台に書き下ろされた小説「ミーナの行進」で谷崎潤一郎賞を受賞。その他著書多数。芦屋市在住。

※図書館本館(伊勢町)では「芦屋ゆかりの作家・小川洋子の作品」コーナーを開設しています。

市制施行50周年記念写真集「芦屋のうつりかわり」を頒布



「芦屋のうつりかわり」
21.6×30.5cm／135頁／
紙表紙・銀箔押し(ハードカバー)
頒布額　500円

写真でみる芦屋の歴史

市制施行50周年(平成２年11月10日)に発行した記念写真集「芦屋のうつりかわり」の在庫本を、行政情報コーナー(市役所北館１階)、ラポルテ市民サービスコーナーで頒布しています。

会下山遺跡と触覚模型

問い合わせ　広報課　☎38-2006

●「広報あしや」バックナンバーは、市ホームページ『広報あしや ON LINE』でご覧いただけます。